

石井米雄・辛島 昇・和田久徳編著

『東南アジア世界の
歴史的位相』

東京大学出版会 1992年 xi+306ページ

桃 木 至 朗

I

日本の学界における東南アジア研究の市民権獲得ということが言われはじめてずいぶんになる。『講座東南アジア学』（全10巻+別巻1 弘文堂 1990~92年）の完結は、それが不可逆の地点まで来たことを示すできごとといえよう。また最近、「アジア史」や「アジアの中の日本史」を語る際に、東南アジア史に言及したり東南アジア研究の概念を援用すること（屋敷地共住集団、双系制、農学的適応と工学的適応、港市論等々）がとみにさかんである。日本人がアジアを論じる際に、ほとんど中国・朝鮮だけをもってアジアと称して怪しまないという長く続いた悪習も、ようやく払拭されてきたようである。

本書は、こうした東南アジア研究の前進の中に巨歩をのしした故永積昭東京大学教授（1929~87年）に対し、東京大学出身者を中心とする先輩、同僚、後輩、弟子たちが捧げた追悼論文集の性格をもつ（扉裏に献辞がある）。だがそれは、錚々たる第一線研究者たちによるばらばらな論文の寄せ集めという通常の形をとらず、「東南アジアにおける国家的政治権力の歴史的位相という角度から、我々の東南アジア研究の意味を今一度問い直してみる試み」（はしがき）として、研究の焦点ないし結節点を明示する意欲的な構成をとっている。本書の章立ては以下のとおりである。

はしがき（辛島 昇）

第一部 伝統的社会的構造と国際交易

第一部の概要（桜井由躬雄）

第1章 シュリーヴィジャヤ王国とチョーラ朝——
11世紀インド・東南アジア関係の一面——

（辛島 昇）

第2章 陳朝期ベトナムにおける紅河デルタの開拓——新デルタ感潮帯の開拓——（桜井由躬雄）

第3章 琉球と李氏朝鮮との交渉——15世紀東アジア・東南アジア海上交易の一環として——（和田久徳）

第4章 「港市国家」としてのアユタヤ——中世東南アジア交易国家論——（石井米雄）

第5章 バレンバン王権の確立——大航海時代のスマトラ港市国家——（鈴木恒之）

第二部 植民地支配と現地社会

第二部の概要（池端雪浦）

第6章 西部ジャワのコーヒー生産と現地人首長の再編——商品生産植民地の建設——（大橋厚子）

第7章 ジャワ村落と導入期「地代」制度——東部ジャワ・マラン県における展開——（加納啓良）

第8章 オランダ植民地支配とスマトラ社会——港市・後背地ネットワークの変容——（弘末雅士）

第9章 フィリピンにおける現地人官僚制度の変容——スペイン体制後期を中心にして——（池端雪浦）

第10章 フィリピンの植民地開発と陸上交通網——アメリカ統治期の住民への影響——（早瀬晋三）

第三部 国民国家の成立と展開

第三部の概要（土屋健治）

第11章 ベトナム民族主義者の国民観——ファン・ボイ・チャウの認識を中心として——（白石昌也）

第12章 キントルの時代——日本軍政下のジャワ一村落の盛衰——（倉沢愛子）

第13章 インドネシアの国家建設——スハルト体制下における技術・戦略産業育成——（白石隆）

第14章 インドネシアの国家と社会——「モニター事件」をめぐる——（土屋健治）

『アジア経済』XXXIV-6（1993.6）

おわりに……日本の東南アジア史研究と永積昭教授
——(山本達郎)

「はしがき」と「おわりに」で研究の大きな流れを解説し、各論文を三部に分類してそれぞれの「概要」で論点を要約するという細かい配慮が、編者たちの本書への意気込みを表わしている。

II

次に各部・論文ごとに内容を紹介する。

第一部は、世界の東南アジア前近代史研究が東西交渉史、(互いに孤立した)各国史をへて指向するに至った「1つの地域史」、しかも世界史の中に位置づけられた地域史としての東南アジア史という視角を強調する。そうした研究の先頭をゆく著者たちは、交易論・ネットワーク論だけでなく、日本における漢籍研究の伝統という強力な武器をもつ。

第1章と第3章は国際関係そのものを扱う。辛島論文は、古典的な「インド化」テーゼ以降分離してしまったまのインド史研究と東南アジア史研究の間に、再架橋しようとする試みである。チョーラ朝の対東・東南アジア関係を主に刻文資料から考証し、2度のケダー遠征をはさんでケダー=シュリーヴィジャヤとの友好関係が続いていたこと、ケダー支配は一時的なものだったことなどを説く。

和田論文は、『李朝実録』に見える15世紀後半、琉球王三代の通交記事中の、各王の在位年代の実際とのずれという、最近の日本中世史研究でも注目されている問題に迫る。著者はこれをニセ琉球使節がボロを出したものとする通説を排し、(琉球王の貿易独占を可能にしたが、代替わり手続きの面倒な)明朝式の割符制度による通交から解く。(琉球)国王と(日本)商人の相互利用という国際的状況で論を結ぶ手際はさすがである。

第2、4、5章は各国史を国際ネットワークの中で説明しようとする。まず桜井論文は、10世紀以降の東南アジア史の一方の主役となる、主要交易幹線から外れた人口過剰地域(上ビルマ・東部ジャワも同様)の1つ紅河デルタにおいて、自給的農業構造がいかに形成

されたかを追究する。東部新デルタ感潮帯の地形図・ランドサット写真と文献資料から、陳朝期の王族による比較的小規模な輪中化と莊園化(それ自体は対中交通ルートにも関連)の過程が検出される。なお芸宗皇帝による「沙洲截脚之法、財産検点之令」廃止を宗室権力削減のため(24ページ)とするのは誤解で、逆に前の皇帝が宗室財産を取り上げようとしたのを旧に復したものである。

石井論文は交易国家アユタヤの構造的特質をまとめようとする。ベンガル湾以西とシャム湾以東の交易ルートの結節点という位置、後背地の森林産物とデルタの米という輸出品、「商人王」としての各国との交易活動とそのための貿易管理・輸出品集荷システム、それを支える港市の多民族性などが明晰に整理され、それらを通じた王権強化(と外国人のタイ化)のシステムが浮かびあがる。ただ「中世東南アジア交易国家論」という副題には、18世紀まで論じている関係上、違和感が残る。

鈴木論文はアチェー、バンテン、マタラム、そしてオランダとイギリスなどの合従連衡うずまく17世紀初頭西インドネシア地域で、中小諸国がいかに行動したかの一例をバレンバン王国に求めたもので、マタラムへの臣属とオランダ商館の誘致、拡大する胡椒栽培の掌握、外国人のシャバンドル(shahbandar)登用などの、安全保障と支配権強化の努力が描き出される。

第二部で扱う島嶼部の植民地支配は、16~17世紀から徐々に進行したという特徴をもつ。そのためもあり、第二部で強く意識されているのは、「古典的な植民地制度論や抑圧と反抗の二項対立的植民地体制理解」(概要)では把握しきれない、仮構とねじれ、歪曲をとまなう、植民地支配と現地社会との複雑な対応関係である。

その意識を最も直接に表わすのは第6章・第9章の現地人官僚制度に焦点を当てた研究であろう。大橋論文は、「社会経済史研究」から抜け落ちていたオランダの対首長政策の変遷が、プリアンガン地方においては、単なる積み出し港支配から直接的生産・集荷管理へとコーヒー収奪システムが発展してゆく過程にみごとに対応していることを明らかにする。

池端論文の方は、18世紀末からの新しい収奪制度導

人と植民地制度による現地人官僚制度の拡大、それを支えるプリンシパリア (principalia) 階層への新興有産階級の参入などをふまえて、19世紀後半における、地域ごとの商品経済の浸透度の差によるプリンシパリア階層のあり方の3つのタイプへの分化を分析する。もっとも浸透度の高い地域ではプリンシパリアが経済力・政治力を失っており、彼らを通じて実現されていた植民地統治体制が崩壊の危機に陥っていたとされる。

順序を戻して第7章(加納論文)は、ラッフルズ時代の東部ジャワ・マラン県の土地査定簿を分析する。村請けでなく小農を直接把握したはずのラッフルズの査定が、実際には耕地・人民とも極端に過小評価されたもので、一部上層農民からのバーゲニングによる貢納収取という伝統的な「搾取」方法の域を出ないものだったという、興味深い事実が明らかにされる。

第8章と第10章は、植民地支配による社会変容に直接斬り込む。弘末論文では、大航海時代には成立していた北スマトラの港市と後背地との複合的相互依存関係(内陸種族は孤立などしていない)をよく理解していなかったオランダによる19世紀後半の介入が、港市の側の一方的権限拡大と内陸部の地位低下・反抗を生み、ひいては今世紀の沿岸マレー族と内陸バタック族との分離・対立を招いたことが説かれる。

早瀬論文はアメリカ支配下フィリピンの交通・通信網と社会変容という、これまたネットワーク論にかかわるテーマを扱う。まずフィリピン全体、ついでミンダナオ島について、交通・通信網の整備過程と、それが地域社会に、マニラを中心とする政治的集権化と資本主義世界システムへの包摂をもたらすさまが叙述される。社会変容の内容を、物々交換から貨幣による商取引へ、などと平板にまとめた点が惜まれる。

第三部は民族意識の創出、日本軍政、国民国家という形での社会統合といった、20世紀東南アジア諸国がひとしく経験してきた代表的な諸問題に関するケーススタディを集めている。いずれも「国際関係論」出身の著者たちが、「東南アジア(史)研究」に与えてきたインパクトの強さがうかがわれる部分でもある。

第11章(白石昌也論文)の対象は、ベトナムにおける近代ナショナリズム形成期を代表する人物ファン・

ポイ・チャウである。彼が19世紀末の勤王運動の地平をこえて自らの思想を発展させてゆく中で、(郷土とは違う)国土、(君主とは別の)国家、(国家と区別される)民族、(臣民と違う同胞としての)国民などの視点を獲得してゆく過程が活写される。

第12章(倉沢論文)は、中部ジャワの一稲作農村における日本軍政下での社会経済の変容を、公文書とフィールドリサーチのデータにもとづいて論じる。作付けの変更、榎の供出、「ロームシャ」の徴発などによる経済構造の変化と、それが村落社会にもたらした分裂・対立をあとづけた上で、日本軍政による変化(村落社会には流動化、全国レベルでは画一化)が、その後オランダ統治が復活しなかったために定着・助長された側面を示唆する。

第13章(白石隆論文)は、スハルト開発政治のもとで経済テククラットとは別に急成長してきた技術テククラットに注目する。そのリーダー格、ハビビ研究技術担当国務大臣と彼の率いる研究技術開発・戦略産業部門を紹介したのち、軍人でも経済テククラットでもないハビビの力の基盤として、開発政治の象徴であること、国軍の対外依存脱却指向と運輸・通信分野の国内治安維持における重要性、日米欧多国籍企業との同盟などを指摘する。

第14章(土屋論文)は、人気紙『モニター』の記事にイスラム陣営が猛反発し、政府がそれに応じて同紙を停刊させた事件を紹介し、その背景として編集長アルスウェンドをスターたらしめた「出版メディアの資本主義化」(非政治化の面を政府が助長)、政府によるイスラムや学生運動の押え込み、それらの不満が国家へでなく「社会から社会へ」向かい、政府によるガス抜きを可能にしていることなど、要するに国家による社会のコントロールが成功しているさまを提示する。

III

最後にもう一度全体について。

以上の各論文の多くが、その著者による一連の研究の一部をなしている。が、繰り返すが本書は、単にそうした別々の研究からさわりだけを集めた総花的な論文集ではない。焦点を明示しようとする編集意図と、

それにこたえうる研究蓄積が、もちろん通史でも教科書でもない本書を、1つの全体としての「東南アジア史像」についての示唆にみちたものにしていく。研究蓄積というのはもちろん、「生態」「交易」「国家」「民族」など今や世界中で「流行」の問題に東南アジア研究が比較的早くから取り組んできたこと、しかもそれらの結節点として前近代の国家類型、近現代の国民国家など国家(的政治権力)の問題を重視してきたことなどをさす。

蛇足めくが、本書も各著者の従来の研究と同様、「東洋史」や「アジア史」を縛ってきたいくつかのドグマをゆるがす力をもつ。たとえば前近代アジアの「自給経済」とか孤立した閉鎖的共同体、一国単位の内発的発展のイメージ、植民地時代といえは経済史と抵抗闘争史がすべてという単純さ、現代史といえは独立と国民国家形成がゴールという安直な見方等々である。本書はもっと複雑かつ動的に、支配と従属におけるインプットとアウトプット、前近代と近代の連続と断絶などの弁証法を読者の前に展開してみせる。

最後に2,3の形式上の問題をあげて、本書評の結びとしたい。

まずタイトルについて。書名は英語名(Historical Dimensions of State and Society in Southeast Asia)の方が内容にふさわしかったのではないか。また第一部の「伝統的社会的構造と国際交易」はいかがなものか。第一にこうした場合の「伝統」という日本語は、近代の側から近代と対比される事柄を(非歴史的に)呼ぶための術語と誤解されやすく、とりあえず前近代の歴史そのものを客観的に解明しようとする第一部には……究極の視点が現代の理解にあったとしても……適当でなかろう。第二に「伝統的社会的」というくくり方は、王朝国家=伝統、植民地=近代という古い二分法を呼びさまし、現今の重大問題である大航海時代ないし「近世」における“前近代と近代との連続と断絶”の問題をあいまいにってしまう危険がある。

もう1つ、「はしがき」か「おわりに」にもう少しページをさくことはできなかつたらうか。日本の東南アジア研究史と故永積教授の業績をより具体的に解説していただけると、後進や他分野の読者にさらに有益であったと思われる。

(大阪大学助教授)